

【本文】

第廿八回 仇を罵て濱路節に死す  
旗を認て忠與故を講る

濱路は涙禁あへず、よに養親の奸曲と、網乾が邪智を聞く間に、はじめの恨いやまして、胃潰れたる有為轉變。假染ながら遠離る、きのふけふなる旅衣、良人の難義を想像る、わが玉の緒の絶なば絶よ。いかで宝刀をとり復して、夢になりともこれらのよしを、告て丈夫に通さんと、思へばころを愛して、やうやくに涙をおさめ、「嚮には理なく縛られ、將て走られし辱めに、恨めしとのみ思ひしが、思はぬ人におもはれて、伴るゝも過世より、脱れぬ契あるなるべし。犬塚ぬしの大刀の事は、わらはも耳熟目熟て侍り。彼人慎ふかければ、よしや火急の折なりとも、謀らるべくはあらずかし。それを輒くも搦替し、と宣ふ言葉偽りなくは、わらはが進退究り侍り。初は情もてあはずといふとも、宝刀を掠めし人としも、しりつゝ俱に走れるならん、と二親にさへ疑れん。かゝればかへる家もなし。況てその性いと正しき、犬塚ぬしに容られんや。まつその刃を見せ給へ」といはれてしばゝうち點頭。「しか思ふは理り也。信乃は心に由断せずとも、伯母夫を救んとて、續て入水したる折、舩にありしは吾儕一人。その刃をのみ搦かえたれば、渠にしらるゝ事なかりき。寔にこの村雨は、わが立身の梯に、なるのみにあらずして、妹妹の契を固する、月下翁にをはします。わが偽らざる證には、抜ば忽地水氣あり。是の刀の奇特なり。檢て疑ひを釋給へ」と諭しつやをら引抜き、通す刀を右手に受、うちかへし見るやうにして、「丈夫の仇人」と呼かくる、声もろともに突閃かす、刃の光りに驚き睨て、左に外し右へ避、沈て拂へば跳越、撃んとすれば、かい潜り、後に立を追詰る、かよはき腕も烈女の念力、侮りかたき刀尖に、左母二郎はますゝ怒り、小刀引抜き、丁々はつし、と受ながし、つけ入りて、濱路が乳下破と破る。破られて苦と魂消る一声、怯む刃を踏落し、跳躑て搔爬む、頭鬢を膝に引著て、霎時疾視て、声ふり立、「牝狗奴、今さら思ひしるや。情欲なればこそ心のどけく、慰めもしつ、賺しもしたね。さるを執念、深刃物三昧、仇人と呼るゝわれにはあらず。さまざまに信乃を忘れかたくは、暇をとらせん彼世で合へ。もしわがころに從はずは、遊女に售るとも身價あり。化骨折らじと思ひしに、已ごとを得ず賣物に、傷けたればそれも詮なし。飽までわれにすらかりし、報ひは觀面、早には殺さず、思ひのまゝに苦まする、なぶり殺しに旅宿の徒然、慰させて熱腸を冷た。この世の名残もしはしが程ぞ。泣たくはなけ、いひたくはいへ。しからは月の出るまで、聽聞せん」と引立て、間遙に突輾し、村雨の大刀掻取て、鞆に納めて、腰に帯、小刀を大地に衝立て、ほとりの株に戻うち掛

懐中なる畳紙より、鑷子を撈り出しつゝ、頤しほゞ搔拵て、些の鬚抜てをり。

さる程に、濱路は既に爰所の深痕に、絶なんとする玉の緒も、良人に引れてやうやくに、起直れども乱髪、顔にかゝるを振拂ひ、「恨しきかな左母二郎。ぬしある女子としりながら、理なく伴ふのみならず、よからぬ事をこゝろ得兒に、わが養親に相譚れ、宝刀を掠めて、わが良人を、死地に陥せし那智奸悪、いかで一ト大刀怨ん、と忻よれども卒意を得遂す、邪慳の刃に現身の、命を隕すわらはがうへに、月日は照らし給はずや。これ將過世の悪報歟。さるにても心もとなきは、わが良人の往方也。今一トたびのあふよしも、亡らん後にわが為に、かつなりにき、と誰かは告ん。形なき世の中や。うたてきものはわが身也。稚き時より二親に、許されたりし妹と伏は、只名のみにて添臥せず。実の親も胞兄弟も、煉馬殿の御内にあり、と又に聞くのみ、名をしらず、顔も認らず年あまた、恋しとぞ思ふ、おもひきや、去歳は煉馬家亡うせて、その老黨も若黨も、皆撃れき、と世上の風聞、よに憂事の数そひて、身の瘦見ゆる三重の帯、環りもあはず圓塚の、野火もろ共に滅てゆく、冥土もおなじ独行、かうなる事も二親の、非義非道とはいふものから、汝が悪の資に成れり。九ツの世をかゆるとも、竭ぬ怨は後竟に、その身に報さるべき歟。人に恨みも、身の薄命も、縁の起は外ならず。歎きをかへり見ぬまでに、情なきは養親達、恋しきは大塚ぬし。わが魂はこの山の、裾野の沼の水鳥と、なりつゝ許我束の間に、いゆきて良人に告まほし。よに惜からぬ命尚、惜むは恩愛節義の為、再び丈夫にあふ日まで、実の親の存亡を、しるよしあらんその日まで、有繫に惜き命ぞかし。なほ甲夜なるにこの山を、踰つゝ來ぬる人なきや。助くる神もなき世歟」と恨みつ泣つなかく、思ひあまりてかき口説く、言葉の露を結びあへず、脆きは女子こころなり。

左母二郎は欠伸して、鑷子に著たる鬚推拭ひ、「あな、ながゞしき諍言かな。謂を聞けば有がたき、親の為には孝女でも、信乃が為には貞女でも、わが為にはひとつも得ならず、命を惜むも夫の為といへばいよく助けがたし。寔に無益の殺生も、皆是己が心から、脆く見えても、つよきは命根、しかも爰所の深痕にて、長物語は感心々々。褒美には只一トおもひに、この世の暇を取らせんず。いでゝゝといひかけて、拿たる鑷子を遽しく、懐へ夾めつゝ、地上に樹たる小刀を抜とり、閃りと見せて、とり直し、血塗序にこの刃で、と思ひにけれど、」等一等、飽まで濱路が念を被たる、村雨にて引導せん。豈歡しからずや」とあざみ笑て、小刀を拭ひ、韆に納めて腰に帯、又村雨の刀を引提て、「觀念せよ」と立かゝれば、濱路は騒がず頭を擡、「縦仇人の手に死す共、丈夫の刃にかゝるは空望。とくゝ殺せ左母二郎。汝も亦遠からず、最期はかくの如くなら

ん」といはいせも果す眼を睨らし、「憎き女が雑言かな。息の根轆ん」と引著て、胸前刺ん、と晃かす、刃の光に先だちて、火定の坑の邊より、誰とはしらず打出す、手煉の銃剣怒たす、左母二郎が左の乳下、裏かくまでに打込たり。灸所の痛手に雲時も得堪す、大刀ふり落して苦と叫ぶ、声もる共に仰反たり。

時に又怪むべし、坑のほとりに忽然と、立踞るゝものありけり。是則別人ならず、火定に終を示したる、寂寞道人肩柳なり。初に異なるそが形容、亦是甚麽なる打扮ぞ。但見、膚には駄舌、南蛮鐵鎗の纏身腹甲を、透間もなく領具して、網に墊れる蜘蛛に似たり。袷には唐織なる段絞筋の廣袖の単衣を、裾短に被なしたる、秋葉を流す飛泉の如し。腰には朱鞞の大刀を跨、足には秋臺の厚鞋を穿、大平金の細密紵に、十王頭の膺褌して、濃紫なる圓括の帶、髯高に紵たり。齡は尚青年、二十左右にもやならんすらん。眉秀、眼清く、色素して、唇朱く、且厚して齒細やかに、月額の迹長く生たる、髮烏して、鬢蒼かり。その志望、善乎悪乎。その行法、正乎邪乎。いまだ分解せざれども、一卜癖あるべき面魂、凡庸ならじと見えてけり。

當下寂寞肩柳は、左邊右邊を見かへりて、徐に歩みよる程に、左母二郎は呼吸環會して、敵近つきぬ、と見てければ、立たる銃剣引抜捨、刀を杖に身を起して、足ながら撃んと進むを、うち見たるのみ些も騒がす、彼此雲時道違して、駭惱し、衝と入りて、矢庭に刀を奪取り、身をひらかして礮と砍る。拳の冴に左母二郎は、筋斗を撲て倒れけり。肩柳これには目をかけず、頻に水氣立沖る、刀の鞘を推立て、刀尖より鐔下まで、瞬もせず信と見て、「現音に聞く村雨の宝劍。抜ば玉散る、露坎雷坎、奇也妙也。焼刃の盡処、天に虹睨の引く如く、地に清泉の流るゝに似たり。豊城三尺の氷、吳宮一函の霜、寔に世に稀なるべし。神龍これが為に雲に吟じ、鬼魅この故に夜哭ん。今はからずしてこの名刀、わが手に入りしは復讐の素懷を遂べき時到れる故。奇也奇也」と左手に移し、右手にかへして又さらに、見れども飽す、嘆賞の、外に餘念はなかりけり。

案下某生再説額蔵は、この朝信乃に別れて、いそぐとすれど後へのみ、心引れて歩果敢とらず。しかも盛暑の時なれば、樹蔭求て彼此に、休ひつ、又走りつ、千住河を渡す比、日は暮果て、途いと暗し。迷ふべき程にはあらぬを、いかにしてか行抜て、駒込村のこなたへ來つ。こゝにやうやく心つきては、立戻るとも途に損あり。本郷坂を横きりて、礪川よりこそ、と思ふに、わが身に假傷造らんにも、なかゝに迂路して、月の出るをまつこそよけれ、と肚裏に尋思しつ、初更過たる比及に、圓塚山を越るになん、火定ありとか途にて聞し、茶毘はいまだ滅すして、その邊明かりけるに、と見れば鮮血に塗れつ、仆れたる男女あり。又白刃を手にする、一個の癖者立在た

り。やつこそあらめ、と端なく進まず。松の樹蔭に躲ひて、その為体を窺ひけり。

さる程に肩柳は、鞆とり揚て刃を納め、よはり臥たる濱路がほとりに、つゝいゝてやをら引越しく、遠しく懐中より、薬をさつ出て口に銜し、「女子々々」と呼活たる、声も薬もきく得てや、見れば怪しき介抱に、うち驚きつゝ口管に、ふり放さんと悶搔ども、肩柳はなほ手を放めず、「いまだ縁故を告す、わが姓名を告されば、仇坎、賊坎と疑ひて、驚きません、おそれもすらん。深痕なれども灸所にあらず。心を鎮てわがいふ事を、聞て今般の志願を遂よ」といはれて息を吻とつき、「さいふおん身は何人ぞ」と問つゝ顔をつち目成れば、我もうち見て嘆息し、「名告れば憚なきにあらねど、夜の繁山外に人なし。こゝに圖らず環會し、われは則そなたの為に、異母の兄、大山道松忠與と呼ばしもの、故ありて去歳の秋より、姿を変、名を更め、寂寞院

【挿絵】「名刀美女の存亡忠義節操の環會」「額蔵」「はま路」「道松忠與」「左母二郎」

肩柳と世に唱する假修験。ゆく所にて火定を示し、愚民の銭を促す事、軍用の為にして、君父の讐を報ふにあり。抑わが主君、煉馬平左衛門尉信盛朝臣、豊嶋平塚の一族共侶、池袋にて撃れ給ひ、わが父大山貞與入道道策大人、自餘の老黨員を竭して、冥土のおん供してければ、煉馬の館も焼撃せられて、生残るもの絶てなし、われ亦命を惜むにあらねど、組で死すべき敵に逢ねば、不思議に戰場を殺奔て、遂に復讐の大義を企、家に傳る間謀の秘術、隠形五遁の第二法、火遁の術を行ひて、修験者に容を変、或ときは、烈火を踏て、愚民等に信を起させ、又或ときは、火定に終を示しつゝ、銭を召び、財を聚めて、軍用に充んとするに、火に投ると見せて、火に投らず、全身焼ごたりとおもはせて、火の外に姿を隠す。これを名つけて火遁といふ。大約隠形に五法あり。第一を木遁といふ。樹に倚るときは形を隠して、敢亦顕さず。第二を火遁といふ。火に遇ぶときは形を隠して、よく人にしらすることなし。第三を土遁といふ。此は是、その足、地を踏ときは、人に形を見することなし。壁に没り、穴に隠るゝ、皆是土遁の一術也。第四を金遁といふ。こは金銀銅鐵をもて、よくその形を隠すもの也。第五を水遁といふ。こは久しく水に没て苦まず、又唯一杓の水を得ても、よくその形を隠すもの也。これを隠形五遁といふ。原是張道陵が道術也。唐山には漢末より、今明朝にもこの術を、よくするものありといふ。我朝には六條院の仁安年間、伊豆の修禅寺に唐僧あり。これ独木遁の術を得たり。後に竊に、兵衛佐頼朝に傳へたり。石橋山の敗軍に、頼朝伏木の虚に隠れて、虎口を遁れ給ひきといふ。その実は、木遁の術を行へるなるべし。又吉岡紀一法眼は、火遁の術を得たるものなり。しかれども人に授けず。源牛若丸、その秘書を竊閲て、亦火遁の術を得たり。文治に高館落城の日、義経既に戦勞れ、城に火を放、自焼

して、塞外に逃れ去りしは、火遁の術によれるならん。この後又さる術を、傳授せしものある事を聞かず。独わが家、祖先より、火遁の一書を相傳せり。しかれ共、その書、奇字隱語にして、曉るもの絶てなし。吾侪年十五のとき、はじめてその書を披閲して、聊發明することあり。是よりして夜となく日となく、讀誦工夫すること三今年、遂にその奥旨を得たり。

しかれどもその法術、左道にして幻術に相近し。勇士の行ふべきにあらねば、父にも告す、人にも授けず、試ることなかりしに、今や君父の讐敵、管領扇谷定正等を撃んとおもふに、一人の資なし。人のこゝろを結んには、金銭にますものなし、と尋思に憂なき火遁の術もて、火行火定と偽りつ、愚民を欺き、彼此にて、些の銭を獲得るときは、はやくその地を立去りつ。今茲は下野下総より、武蔵の豊嶋を拳縁し、こゝにも火定の詐欺もて、纔に銭を召たれども、つらくおもへば欲する所、忠孝に似て実は賊なり。縦夥の資を得て、大敵をうち滅すとも、かゝる不良の事をして、人を欺き、物を掠は、なかゝに汚名を遺さん。いと悔しくも正なき事に、志を費せしは嗚呼也けり、と慚愧に堪ず、驪で隱家に退きて、假髯をかなくり捨、舊の姿に更めつ。身ひとつ也とも定正を、狙撃んと思ひ決めて、再び踰る圓塚山に、旅人の鬪諍見過しかたく、躲れて雌雄を窺ふに、その一隊三人の、悪棍ははや撃れたり。残るは一人、敵手の癖者、いと艶妖たる女子を拐撃て、わりなく逼る色情利慾に、従されば怒に乗して、遂に女子に手を肩せつ。こゝにはじめて此彼の、怒罵哀傷を竊聞くに、女子は大塚の村長、暮六が養女也。濱路といふは今の名ならん。われに異母の女弟あり、乳名を正月といへり。彼は二才、われは六才のころなるべし、云云の故ありて、豊嶋郡大塚なる村長、暮六とかいふものに、生涯不通の約束して、そが養女に遣したり、と父の告させ給ひしは、これなるべしと思ひしかば、その危窮を見るに忍びず、銃鋏を打かけて、女弟が仇を撃とめたり。聞くにそなたは幼稚より、結髪の方あり。そが為に苦節を成りて、命を惜ず、仇を罵り、又実の親同胞を、ふかく慕ふ心操、貞にして又孝なり。しかれども卒意を得遂ず、われ亦彼処にありながら、救ふことの遅して、事のこゝに及べるは、天鑿地知の疎にして、善悪無差別に似たれども、亦是輪廻の致すところ歎。脱れかたき因果ならん。

言長く共苦痛をしのびて、迷ひを散し給へかし。そなたの母は黒白と呼ばれて、わが父の妾なりき。わが母を阿是非といへり。亦是父の側室なれども、男子を産たる徳に依て、嫡妻にせられたり。はじめわが父道策大人の内室世したれども、又後妻を娶り給はず、子孫の為に側室を畜て一兩年を過し給ふに、是さへ孕むべくもあらねば、又一妾を畜給ひき。初の側室は黒白にして、後に來つるは阿是非也。そのときわが父戯れに、両妾に宜く、汝等兩人誰にもあれ、男児を

産るものを、後妻にせんと約し給ひつ。かくて阿是非は有身て、長祿三年九月戊戌の日に、男児を産てけり。出生の子は則われ也。われ生ながらにして、左の肩尖に、大ぎやかなる瘡あり、その形松の癭に似たればとて、道松とぞ呼れたる。十五歳の春元服して、名を忠與と命せらる。父の歡び推て知るべし。されば約束なりければ、わが母をもて正妻に、推のほし給ふになん、黒白は妬怒みつゝ、氣色にはあらはさず。寛正三年の春、渠は女の子を産てけり。

臨月早春なりければ、女の子を正月と名づけらる。正月は、妹そなたの事也。さる程に、黒白はわれより後に來つゝ、阿是非にはや男児を産れつゝ、われは後れて女の子を産ては、六日の晝浦十日の菊、それにもましてあるにかひなし。こゝにますます堪すやありけん。寛正四年の春のすゑ、わが父は、主君煉馬殿の使者として、京都將軍家へは候の折から、黒白は、今坂錠庵といふ醫師を竊に相諱て、わが母を毒殺し、吾儕を盗殺しつゝ、時疫にて母も子も、暴に身まかりぬと偽りて、菩提寺へ葬りけり。その月の下流、わが父京都の官務をはりて、下向の旅宿にて凶夢あり。これより日毎に曾つち騒げば、こゝろいよゝ安からず、夜に日に繼て煉馬に販著て、様子を問は、妻子の頓滅、葬てはや廿日あまり、一両日と聞えしかば、驚き憂えみて、次の日、寺へ詣つゝ、臺所に香華を手向給ふに、殯下に當りて、小兒の啼声してければ、更に驚き怪みて、住持に告て、人を聚へ、發せて見給ふに、吾儕は則甦生して、啼こたますゝ甚し。躬て扶出しつゝ、これを見給ふに異なることなし。只肩なる瘡の上、いと黒やかなる痣をへ生て、形牡丹の花に似たり。噫痛しきはわが母也。全體既に腐爛して、いかにともすべなければ、舊のごとくに埋葬し、父は吾儕を携かへりて、まづ主君に聞えあげ、俄頃、奴婢等を召よせて、事の趣を告給ふ。この年吾儕は六歳也。奴婢等を聚會られし折、父に對ひて「箇様々々、如此々々の事により、母は非命に世を去給ひ、吾儕も合葬せられたり。汝は則黒白也。そを賣たる癖者は、錠庵也」と告しかば、父は再び驚き怒りて、即座に黒白を縛めつゝ、みづから鞠問し給ふに、しばゝ陳じたりけれども、物が憑てやいはせけん、小兒なれども告訴明白、竟に脱るゝ路のなければ、黒白は罪に伏したり。これによりてわが父は、更に主君に訴まつしつ。某甲某こつけ給はりて、錠庵を搦捕、いたく責問るゝに、そが首伏の趣も、黒白と異なることなければ、此彼齋一、法のまにまに斬罪梟首せられたり。しかれども、父の怒りなほおさまらず。正月は二歳の女の子なれども、その母大逆無道也。絶てわが子とすべからず。生涯不通の議をもつて、さるべきものに取らせんとて、その人を求給ふに、外聞を憚りて、世に忌といふ四十二の、二才児といひこしらへ、養育の料として、永樂錢七貫文を齎して、大塚の村長、墓六とかいふものに、養ひ取らせ給ふとなん。こ

はわが年十二の青、母の七回忌の折に、はじめて父の告させ給ひき。

現わが纒に六才のとき、黒白が悪事を告じこゝ、一点ばかりも是をおぼえず。こゝにはじめて母の横死も、そなたの事も巨細にしつゝ、懐舊の涙禁かねて、つくくゝと想像れば、正月もおなじ父の子なれ共、母と母とは怨敵也。親の業させ給ひし女弟を、われ皆見かへるよしあらんや、と心に占てこの後は、父に問はず。父も亦、再びいひ出給はねば、忘るゝ如く年を歴て、おもひかけなき今宵の再會、且躲ひて竊聞は、その心さま実母に似ず、貞實にして孝順也。然るを薄命かくの如く、邪慳の養父母には事れども、おもふ郎にあふこと叶はず、無慙の癖者逼迫し、これが為に害せらる。輪廻によつて鮮ときは、実母黒白が悪逆の餘殃としもいふべき哉。しかれども父の子也。豪奪せられて身を汚さず、死に至るまで操をかえず、今般にも親を思ふ。その貞その孝空からで、不憶兄に環會、即坐に仇を殺すに及びて、その撃とこゝ此彼等しく、痍は左の乳の不也。善には必善報あり、悪には必悪報あり。今生の薄命は、実母の故にかくの如き哉、来世はその身の功德によりて、佛果を得んこと疑ひなし。その孝心を告るに由なき、父は煉馬家第一の老臣たり。後妻の横死によりて、わが徳薄しと慚愧しつゝ、遂に主君に聞えあげて、祝髪入道し給へ共、家老職は舊の如し。

かくて去年、池袋の戦ひに、比類なき働きして、管領定正が家用、龍門三宝平に撃れ給ひき。享年六十二歳也。われ復讐の志願成らずは、亦復讐の手に死ん。苟且ながら修行者に、姿をかえし因あれば、又世をしのぶ烏髪の入道。父が法名を象りて、犬山道節忠與と名告るべし。かくれば撃とも撃るゝとも、存命べくもあらぬ身の、後れ先たつ冥土の伴侶、父尊靈に勤鮮奉りて、身後には親子の對面させん。それを今般の思ひでにせよ。女弟々々」と叮嚀に、説示しつゝ、又勤りつゝ、手肩に熟たる勇士の介抱、猛く見えても骨肉の、誠はこゝに顯れたり。現一回の長物語に、十九日の月出て、野火に代りて明く光る、亥中ははやく深そめて、子の時近くなりけり。